

価値, 価格, 資本

Q年10/26 ,3年10/22)

担当: 久野秀二 (Hisano, Shuji) 農業市場学分野・助手

価値とは何か

□ 商品の二重性

- 市場経済では、社会的分業編成は商品交換の成否によって事後的に達成される。その際の指標が商品の交換比率 (= 交換価値) であり、その貨幣的表現が価格 (市場価格) である。
- 貨幣も元来は一つの (しかし特殊な) 商品であった。つまり、ある商品と貨幣の交換比率 (価格) は、ある商品と別の商品との交換比率と同じ原理によって説明できる。
 - ◆ 1着の上着 = 3万円 → 1着の上着 = xグラムの金 → 1着の上着 = y個の商品A, z個の商品B, ... etc
- なぜ一定の比率で交換できるのか? それらが**共通の尺度** (その生産に人間労働が投下されたという事実 → **社会的平均的に必要とされる労働時間**に「翻訳」) によって等価であると評価されるから
- この場合の労働 (= 抽象的人間労働) を、その具体的な形態 (上着をつくる労働, 商品AやBをつくる労働 = **具体的な有用労働**) から概念的に区別
- 前者の労働によってつくられる**価値**を、後者の労働によってつくられる**使用価値**から概念的に区別。交換価値の実体は前者の価値!

→ 労働価値説

...つづき

- この価値を基準とする価格変動によって需給バランスを「事後的に」調整するメカニズム = 価値法則が、市場経済の基本
- いくつかの留保
 - 「社会的平均的に必要な労働時間」は誰がどうやって決めるのか?
 - ◆ 経験的, 事後的, 集合的に (→ **一物一価の原則**)
 - 原材料や設備費, 流通経費などのコストはどのように考慮されるのか?
 - ◆ それらのコストも、過去の労働の産物であるから、やはり「労働時間」に還元することができ、当面は捨象して考える
 - 短期的には変動しない価値基準と、日々変動する市場価格との乖離をどのように理解したらよいのか?
 - ◆ 価値と通りの価格での販売によって平均的な利潤を確保 (→ **価値実現**)
 - ◆ それより高い価格 (需要過多) で超過利潤を、低い価格 (供給過多) で平均以下に
 - ◆ より多くの利潤を求める競争 (**競争の強制法則**) が結果的に需給の調整をもたらす
 - ◆ **総労働 = 総価値 = 総価格**という理論的前提のもとではじめて、「価値実現の成否 → 生産資源 (含労働力) 配分の変動 → 需給の変動 → 価格の変動 → 価値実現の成否」という市場メカニズムの作用を理解することができる

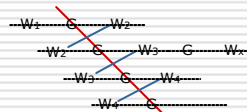
貨幣の機能

□ 価値尺度機能

- 商品価値の価格 (共通単位への還元 ex. 円, ドル, ユーロ) を表現

□ 流通手段機能

- 交換過程における商品の販売と購買との二重化
 - ◆ W-G 商品の貨幣への転化 (販売)
 - ◆ G-W 貨幣の商品への転化 (購買)
- 商品交換の総過程 (= 商品流通) を効率的に媒介
 - ◆ 物々交換がもっていた個別的・地域的な制限を突破 (市場の発展)
 - ◆ 当事者たちには制御できない社会的連鎖が発展し、社会的分業がますます見えないものに → 景気循環



貨幣の機能

- 諸商品の価格総額 / 貨幣の流通回数 → 必要流通貨幣量
- 金章標 (銀銅銅貨や紙幣) の発生
 - ◆ それ自体は無価値だが、国家によって強制的に通用 (多様な銀行券から中央銀行券へ ex. 日本銀行券)
 - ◆ 金本位制 (金兌換制) のもとでは、紙幣 (銀行券) は元来、金請求権を意味した
 - ◆ が、必要貨幣量を超えた紙幣発行の可能性
 - ◆ 価値が不安な場合でも価格が上昇 = 名目的な物価騰貴 (インフレーション)
- 物価上昇のメカニズム
 - ◆ 短期的な需要と供給のアンバランス (需要 > 供給)
 - ◆ 劣質 (← 生活水準) の上昇による価値自体の上昇 (実質的物価騰貴)
 - ◆ 原料 (石油等) 価格の高騰や為替変動等の外生的要因にともなう物価騰貴
 - ◆ 必要量を超えた紙幣の流通 ... 価値水準と乖離した価格 (名目的物価騰貴)
 - インフレ政策 (膨張する対外債務への対応, 財政赤字を補填するための国債等の大量発行, 景気刺激策 = 調整インフレ)
 - 実体経済と乖離した貨幣取引の肥大化 (信用膨張, バブル経済) ... 一方的な購買力の創出 ... 労働価値説にもとづく価値法則を理解すれば、調整インフレ論 (ゼロ金利政策や日銀「量的緩和」政策) の虚構性がわかる

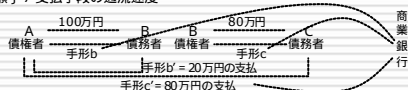
...つづき

□ 蓄蔵手段機能

- 商品流通の発展にともない、購買の販売に対する先行の可能性
- 「現実の貨幣」の必要
- 必要貨幣量の調節機能 (「現実の貨幣」のプール ex. 預貯金, 積立金)

□ 支払手段機能

- 商品流通の発展にともない、商品譲渡と貨幣受取の時間的分離 (いわゆる掛け売り・掛け買い)
- 債権・債務関係の発生 → 手形の発行 (→ 商業銀行による仲介)
- 支払期限に達したときの債務支払のための「現実の貨幣」が必要
- 必要支払手段貨幣量 ... { 支払われるべき債務総額 - 相殺される支払総額 } / 支払手段の流通速度



…つづき

- 世界貨幣機能
 - 価格の度量標準や金章標は各国特有の形態をとるため、国際流通に際して一般的に通用する決済手段が必要
 - 金本位制・兌換制のもとでは金が、不換制移行後はドルが最終決済手段として通用 (cf. 1931 英金本位制停止, 1971 金ドル交換停止)

Hokkaido University, Faculty of Agriculture

資本主義的生産の担い手 企業

- 企業活動の目的
 - 生産と営利の追求・・・特定の使用価値の生産ではなく、儲け(利潤)の源泉となる価値の生産(儲かりさえすれば、何をつくっても構わない)
 - ...Dutch electronics giant Philips may be planning to get rid of its consumer electronics division. In the German newspaper Die Welt, Philips board chairman Gerard Kleisterlee was quoted as saying that it doesn't make sense to continue producing goods which don't make a profit. Philips made its name in consumer electronics but wants to concentrate in future on products for the medical market, which are very profitable. Mr Kleisterlee expects even better results from this division, as an ageing population will be needing more medical goods..
- 貨幣から資本へ
 - 営利活動のために投下される貨幣、したがって事業を終えた後により大きな貨幣量として手元に戻ってくる貨幣が、資本(自己増殖する価値)
 - 商品の流通 $W-G-W$ (買うために売る)
 - ◆ この行為が意味を持つのは「最初の W と最後の W が異なる使用価値」であるとき
 - ◆ つまり $W-G-W'$
 - 資本の運動 $G-W-G$ (売るために買う)
 - ◆ この行為が意味を持つのは「最初の G と最後の G が異なる価値量」であるとき
 - ◆ つまり $G-W-G'$ ($G'=G+g$) g =剰余価値(→利潤)

Hokkaido University, Faculty of Agriculture

企業活動のサイクル

- 最初の貨幣 G (資本) の調達
 - 経営者の自己資金(歴史的にみれば過去の剰余価値)
 - 金融機関や他の貨幣所有者からの借り入れ(利子と引き換え)
 - 株式発行による出資金の調達(配当金と引き換え)
- 事業(生産活動)に必要な商品 W の購入
 - 労働力市場で労働力商品 A を購入(A 商品の価格 = 賃金)
 - 生産財市場で生産手段 P_m を購入(機械設備, 原材料など)
- 商品 W' の生産
 - 生産過程(労働過程 +)
- 商品 W' の販売と貨幣 G' の取得
 - 流通過程(→専門企業の成立 = 商業資本)
 - 消費手段→消費財市場 生産手段→生産財市場

Hokkaido University, Faculty of Agriculture

…つづき

- 貨幣 G' の再投資
 - 貨幣 G の再投資(単純再生産)
 - 利潤 g →
 - ◆ 個人資金の利子と元本の支払い
 - ◆ 借入地の地代の支払い
 - ◆ 株主への配当金の支払い
 - ◆ 経営者の役員報酬の支払い
 - ◆ 再投資(拡大再生産)

Hokkaido University, Faculty of Agriculture

剰余価値はいかにして発生するのか?

- 等価交換の原則
 - 一方の得は他方の損。社会全体で日々大量に繰り返される商品交換においては、個別の損得は相殺されるから、価値どりの商品売買が行われていると(理論的に)前提
 - 価値どりの生産手段と労働力商品を購入し、価値どりの生産物(商品)を販売して、どこに剰余価値が形成されるのか??
- 価値形成のからくり
 - 商品売買(流通過程)で誰にも損得が生じないとすれば、カギは生産過程に
 - 生産過程(生産手段と労働力の消費過程)で価値に変化が生じる商品→労働力 cf. 生産手段が有する価値は新商品に移行するだけ
 - 労働と労働力の区別
 - ◆ 労働 = 一定の目的を持った活動, 時間的に継続する一つの過程的行為
 - ◆ 労働力 = 人間の肉体に備わっている労働能力
 - ◆ 労働力の発動 = 労働力商品の消費 = 労働 という概念的関係

Hokkaido University, Faculty of Agriculture

…つづき

- 労働によって形成される価値(商品価値)
 - = その生産に「社会的平均的に必要な労働時間」として把握 cf. 単純労働と複雑労働との差異
- 労働力商品の価値
 - = 労働力商品の生産(再生産)に要する社会的平均的労働時間
 - = 労働者そのものの生産(再生産)に要する社会的平均的労働時間
 - = 労働者の日々の生活に必要な消費財等の価値(商品価値)
- つまり、剰余価値は雇用主(企業)が労働力商品の代金として労働者に支払う価値(賃金)と、労働者が生産過程(労働過程)で新しく形成する価値との差額として発生

Hokkaido University, Faculty of Agriculture

社会的・歴史的関係としての資本

- 労働力商品の売買が可能であるためには「二重の意味での自由な労働者」の存在が前提
 - 労働者が自分の労働力を商品として売ることができるということ（法的にも人格的にも自由な契約者として個人が確立しているという意味での「自由」）
 - 労働者が自分の労働力を商品として売らなければならないということ（自ら生産手段を所有していない or 生産手段から切り離されているという意味での「自由」）
 - 他方の極に、資本として投下するだけの蓄財（貨幣の蓄積）が必要
- これらの条件は歴史的に形成された（本源的蓄積）
 - 例えば・・・第1次エンクロージャー 15世紀末以降、イギリスが毛織物輸出国として成長してゆく過程で、商品としての羊毛生産を目的とし、耕地の牧場への転換がはかられた。これは地主および富農たちによる暴力的な土地収奪を伴ったが、牧畜化された開墾済み地がごくわずかな労働力しか必要としなかったため、貧農の農村・浮浪者化をひきおこし、深刻な社会問題を生んだ。第2次エンクロージャー 17、18世紀を通じて、エンクロージャーはそれなりに進出したが、それが再び猛威をふるうのは、産業革命が展開される18世紀後半である。(1) 羊毛ではなく、穀物生産を目的としていること。(2) 議会法を根拠としていちおう合法的な体裁をとって展開されたことを特徴としている。
 - 現在もつづく本源的蓄積過程・・・農民層分解→零細農の淘汰と労働者化

Hokkaido University, Faculty of Agriculture

次週の内容

- 2年目11/2,3年目10/29
- 講義内容
 - 社会経済学の基礎理論（2）
 - 資本の論理：剰余価値生産のしくみ
- 次週までの課題
 - テキストのコピーを読んてくること

Hokkaido University, Faculty of Agriculture